

# 中世入西の板碑 展示解説シート

## 板碑を造立した人々の姿

板碑は、13世紀前半から16世紀の長い間にわたって造立ぞうりゅうされ続けましたが、その性格や造立主体のあり方は、年代によって大きく異なります。「万福寺の板石塔婆」は14世紀初頭に浅羽あさば行成ゆきなりの供養塔として、浅羽氏の子孫によって造立されたものです。14世紀代に板碑を活発に造立していたのはこのような武士層であり、追善供養ついでんくようや逆修ぎやくしゆを目的としたものが多くなっています。武士層にとって、板碑の造立は宗教的な行為であると同時に、一族の結束を高めるための政治的な意味合いもあり、造立の経緯や関係者の名を刻んだ立派なものが立てられました。

一方、三福寺遺跡から出土した板碑は15世紀代のものが多く、刻まれた銘文はシンプルな内容で墓碑のような役割であったと考えられます。また、板碑の大きさも前時代と比べて控えめになっていきます。この頃になると、板碑造立の主体は武士層から一般の人々へと拡大していきました。また、15世紀後半になって板碑の時代の終わりが近付くと、月待つきまちという農村の信仰と結び付いた内容へと変わっていきます。

## 中世の入西をのぞく

中世坂戸の様子については明らかになっていない部分も多い中、入西地域は中世の様子が比較的明らかになっています。平安時代末から鎌倉時代にかけて、越辺川流域は武蔵武士・児玉党の領地となっており、入西地域は浅羽行成を祖とする浅羽氏の拠点となっていました。入西地域には、北浅羽館（北浅羽）・堀込館（堀込）・三福寺館（小山）・長岡氏館（長岡）など、多くの中世城館が分布しています。いずれも堀や土塁はほとんど残っておらず、伝承地が多いことから、詳しい年代や性格は分かっていませんが、浅羽氏によって地域に密着した城館ネットワークが築かれていたと考えられます。

現在の入西地域の市街地部分には、入西遺跡群が広がっており、一般の人々の生活の様子が調査によって徐々に明らかになってきています。台地や微高地の上には掘立柱建物からなる集落が営まれ、少数ながらも当時の高級食器である中国産磁器も見つかっています。越辺川沿いの沖積地には、古代より続く水田地帯（入西条里）が広がり、浅羽氏の経済基盤を支えていたと考えられます。さらに、金井遺跡（新堀）では鎌倉時代の鋳物工房が発見されているほか、堀込館（堀込）には番匠という地名が残されており、職人が活動していた様子もうかがえます。

## 入西地域の主な中世遺跡



※城館の名称は『埼玉の中世城館跡』によっています。